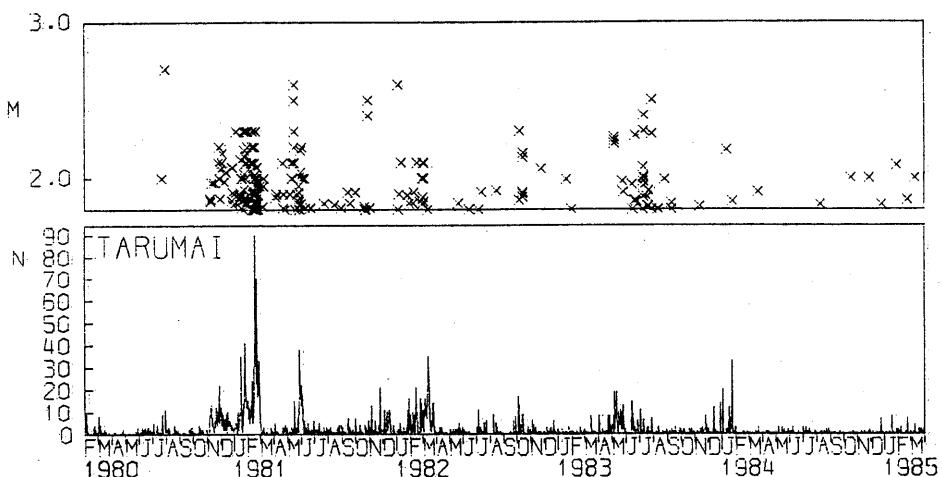


# 樽前山火山観測(1984年6月-1985年3月)\*

北海道大学理学部附属有珠火山観測所

1978-1981年の「群発地震活動とA火口活動」、1983年のドームとその周辺部での、噴気及び地熱活動の活発化といった、顕著な現象は本期間には認められなかった。地震活動は前報よりさらに低い状態で推移した。地熱活動にも進展は認められなかった。地殻変動は依然として、静かな状態にある。



第1図 樽前山の日別地震回数( K A R 点で  $0.2 \text{ mkine}$  以上 ) と  $\text{MF-P} > 1.8$  の地震

Fig. 1 Daily frequency of volcanic earthquakes at Tarumai volcano(Amax  
 $> 0.2\text{mkine}$  at KAR) and large earthquakes ( $\text{MF-P} > 1.8$ )

第1図は1980年2月の無線テレメーターシステムによる常時観測開始以降の、南山腹唐沢観測点(KAR)において、最大振幅  $0.2 \text{ mkine}$  以上の地震の日別頻度を示す。1980年11月-1981年2月、1981年11-12月、1982年1-3月、1983年12月-1984年1月と、冬期に地震活動が活発化する傾向があったが、今冬はそのような現象も認められなかった。1967年10月に始まった気象庁A点の観測でも、冬期に地震活動度が低いのは1972年、1983年の冬と今回の3回だけの現象である。また、1984年2月以降、13ヶ月間も静穏期が続くのは初めての現象で、気象庁A点の観測でもなかったことである。これに対応してMF-P 2級の地震も著しく少ない。

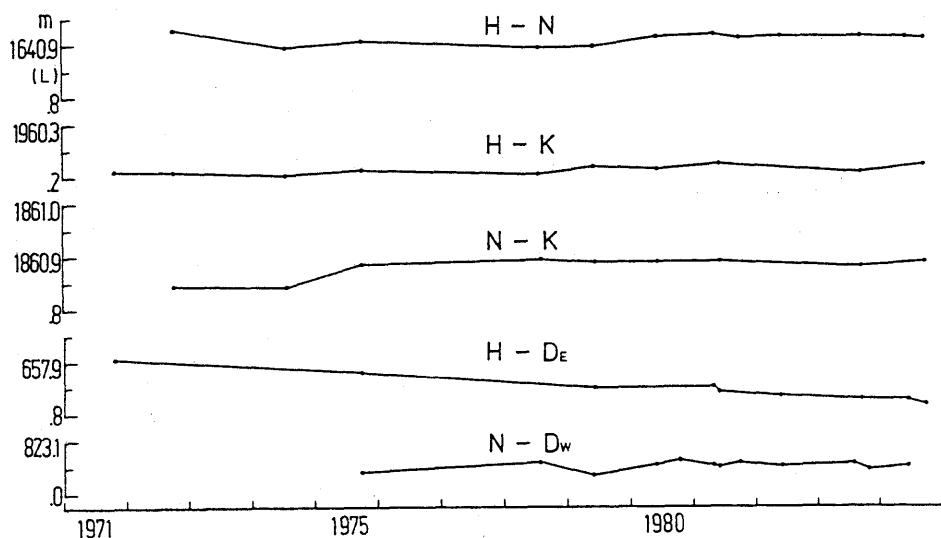
第1表は1984年1月からの前報の分類に従った類型別の月別の地震と微動の数である。地震数は何れの型も少ないが、短周期卓越型微動(CT)が1984年11月に多くなっている。しかし、これらの微動は何れも振幅は小さく継続時間も短いもので、活動の活発化を意味するものではない。

\* Received May 7, 1985

第1表 樽前山の月別類型別地震回数

Table 1. Monthly frequency of earthquakes (HF, LF and D correspond to high frequency, low frequency and D-type events) and volcanic tremors (CT and LT correspond to continuous and low frequency isolated tremors).

		M>2	HF	LF	D	ALL	CT	LT
1984	JUN	0	7	2	8	17	5	0
	JUL	0	13	3	13	29	2	0
	AUG	0	12	0	20	32	6	0
	SEP	0	6	0	11	17	3	0
	OCT	1	5	0	7	12	0	0
	NOV	1	8	0	6	14	19	0
	DEC	0	9	7	6	22	0	0
1985	JAN	1	17	0	9	26	2	0
	FEB	0	16	3	6	25	3	0
	MAR	1	23	0	6	29	6	0



第2図 樽前山山頂部の辺長変化

Fig.2 Results of distance measurements on the summit area of Tarumai volcano.

第2図には山頂部の光波測量の結果を示すが、依然として、有意な変化は認められない。また、山頂火口原内南西部に設置された傾斜計、及びTilt levellingによる傾斜の変化も、前報<sup>1)</sup>と同じ傾向が続いている。何れも、変化量は若干低減しており、静穏な状態が続いていることがわかる。

### 参考文献

- 1) 北海道大学理学部有珠火山観測所(1984)：樽前火山観測(1984年4月—1985年3月)，噴火予知連会報，30，74—80。